

(問題は次のページから始まる)

第1問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

環境問題はむずかしい。温室効果ガス問題一つをとっても、ほとんど議論百出、なにがどうなっているのか、よくわからない。アメリカは京都議定書を認めないし、ヨーロッパ⁽⁷⁾ ショコクはそのことがけしからんという。生物多様性を維持せよといっても、なにをいっているのか、具体的には理解できない。トキが絶滅しなければいいのだろうか。ゴキブリは減ったほうがいいんじゃないか。(1) こうした環境問題のむずかしさは、それがシステムの問題だということとある。システムというのは、たくさんの要素が集まって、全体として安定したふるまいをするような存在である。(a)、細胞は生物の基礎となるシステムである。自分で食物をとり、一定の姿を維持し、自分と同じものをつくり出す、つまり増殖する。細胞に含まれるタンパク質には万という種類がある。そのほかに水も多量に含まれているし、無機イオンもたくさん入っている。しかもそれが、きちんとした構造をつくっている。そんなものを全体として説明することは、ややこしくて、とうていできない。

人間社会ももちろんシステムである。生態系も「系」という言葉が示しているように、システムとして把握された生物の世界である。環境問題とは、こうしたシステムについて考えることだが、現代人はそれが苦手なのである。一つの理由は、もちろんややこしすぎるからである。システムは、簡単に理解しようとするには、複雑すぎる。(2)

さらに現代の学者は、システムの理解が根本的に苦手である。どうしてだろうか。

その理由は、現代の科学という「システム」にある。科学者になろうとする若者が、まずしなければならないこととはなにか。「論文を書くこと」である。私が大学院生だった一九六〇年代には、すでに Publish or Perish (書くか、去るか) というアメリカ型の価値観が、ささやかにはじめていた。論文を書かなければ、業績にならない。業績がなければ、研究費がもらえない。とくにアメリカの場合には、研究費から人件費が出る。研究費がないということは給料も⁽⁸⁾ マンゾクに払えないことを意味した。私が研究者生活をしてきたあいだ、この傾向は日本でもどんどん強くなった。いまでは偉い先生とは、立派な論文をたくさん書いた人なのである。それなら「学界」がどうなるか、予想できるはずである。論文が書きやすい分野、論文になる分野に人気が集まる。科学者だって、社会のなかで食わなければならない。生きるため、偉くなるためには、論文を書かなければならないのである。それがシステムの理解を妨害する。といつても、なんのことか、通じないであろう。論文を書くことは、システムを扱うことと、いわば(甲)なのである。そのことを、自分の経験した例から説明しよう。

私は解剖学を専攻した。六〇年代でも、解剖学をやるなどといえば、

「いまさら解剖なんかやって、なにかわかることがありますか」

と、素人に訊かれたものである。解剖なんて、山脇東洋、杉田玄白の時代のものじゃないか。

「いまさらそんなこととして、どうなるというの。若い者は生化学でもやりなさい」

それが当時の「常識」だったのである。

大学院に入つて、解剖を専攻することにした。今度は素人ではなく、周囲の先輩、別の分野の専門家にいわれる。

「お前なあ、スルメ見て、イカがわかるか」

スルメつまり死体を見て、イカすなわち生きた人間のことがわかるか、というのである。この批判は、若い私にはずいぶんこたえた。

基礎医学であれ、⁽⁹⁾リンシヨウであれ、医学者はたいてい生きた対象を扱う。死んだ人なんか見ているのは、解剖関係の分野だけである。

六十歳を過ぎると、ナインダと思う。イカがわかるかと訊いた先輩たちは、論文を書いて偉くなった。でも論文とはなにか。生きものを情報化したものである。X。止まったものである。論文を百万集めたつて、大腸菌一つできない。システムは構築でき

ないのである。いうなれば、論文こそが、生きもののスルメなのである。それならあの先輩たちは、要するにスルメづくりの専門家だったんじゃないか。

ある学会でそういつたら、

「じゃあ、お前はなんなんだ」

と、また反論が返ってきた。だから私は、

「私はスルメを裂きイカにしていた、裂きイカ業者です、それで生きたイカがわかるといった覚えはありません」

とお答えした。

これは単なる冗談ではない。システムを情報化すること、つまり生きものについて論文を書くことが、十九世紀以来の医学・生物学の仕事だったのである。生きものという複雑⁽¹⁰⁾カイキなシステム、その一面をとらえて、論文という形に「情報化」する。それがここ百五十年間、科学がもつぱら従事してきた仕事だった。その作業の向きを逆転して、情報からシステムを構築する作業は、すっかりお留守だったのである。

ロボットをつくる。そういう簡単な例を考えたら、すぐにわかるはずである。ロボットはきわめて単純なシステムと見なすことができる。ロボットをつくる人は、論文を書くだろうか。そんな暇があったら、いまのロボットを改良しようとするであろう。絵描きさんは、「どうしたらいい絵が描けるか」という論文を書くだろうか。そんな暇があったら、よりよい絵を描こうとするであろう。

(b) 科学の世界は、ここ百五十年間、システムをひたすら情報化してきたのである。おかげで複雑なものを簡単に説明するのは上手になったが、複雑なものを上手に動かすのは下手になったらしい。だから専門家は説明はしてくれるが、どうすればいいか、それはわからなくなった。説明の詳しさに比べて、「どうすればいいか」の乱暴さは、目に余るものがある。そういつてもいい。

複雑なシステムを単純化して説明する。そのためには(乙)に説明するしかない。だから専門分野がイヤというほど分かれた。論文は死ぬほど出る。でも全体がどうなっているか、だれにもわからなくなったのである。

右のように説明すると、

「じゃあ、この先どうしたらいいんですか」

と訊く人が多い。情報化するというのは、脳の外にあるシステムを脳の中に入れるようにすることである。脳の中に入れば、シミュレーションができる。シミュレーションとは「ああすれば、こうなる」ことである。違う風にすれば、違う風になる。それを繰り返して、自分にとっていちばん都合のいい例をとればいい。

つまり「どうしたらいいか」という質問は、シミュレーションが成り立つことを前提にしている。自然に対しては、それが成り立たないことが多いのは、すでに説明した。システムが「ああすれば、こうなる」ようになっていくかどうか、そもそもそこがわからない。だから力オスなのである。それならまったくわからないかというなら、わかることもある。じゃあ、なにが問題なのか。「どうすればいいのか」と質問する人の考え方が問題なのである。どうしたらいいかわからないことは、人生には山のようにある。それを認めたいで、「シンボウ強く、努力を続ける根性」が必要なのである。自然を相手にしていれば、ひとりでにそうした性格が育つ。それがないのが、都会人なのである。即座に答えが出ることを求めるからである。だから田舎で暮らす必要がある。(3)

(c) 独立した大人が、「じゃあ、どうすればいいんですか」と、他人に訊くこと自体が変だと気づくべきなのである。説明だけして、どうすればいいか、それをいわないのは無責任だという意見がよくある。都会の人はそういいたがる。A そういう意見こそ、まさに無責任である。相手の説明とは、自分の脳への入力である。そうした入力を、それ以前からの知識経験と混ぜ合わせて、「自分の脳」という計算機が「出力」する。それが「どうする」なのである。その出力こそが、自分の責任ではないか。出力は、いかに小さ

いといつても、かならず外界を変化させる。それを他人のせいにしてはいけない。どういう出力をするか、それを決定する存在を個人という。キリスト教の世界では、それを「人間には自由意志がある」という。

環境問題を議論すると、

「そうはいっても、昔の生活には戻りませんからねえ」

と慨嘆する人がかならずいる。ジャーナリストにはとくに多い。そこで私はカッと怒る。「戻りません」という証明を、だれがしたのか。それをいうなら、「昔の生活には戻りたくありません」だろうが。それなら本人の意見だから、それを私はそれなりに尊重する。しかしそれを「戻りませんからねえ」と、あたかも昔に戻ることが「客観的に不可能」であるかのように主張するのは、インチキである。(4)

環境問題のむずかしさは、こうした「考え方」の問題によく表れている。では「どう考えたらいいのか」。

環境を考える第一の段階は、自然や社会といったシステムを情報化することである。それがこれまでの科学がやってきたことだと説明した。情報化されたのは、実体としての自然や、現実の社会である。情報の基盤には、情報源である「実体」がある。医療でいうなら、患者さん自身は実体で、検査の結果は情報である。患者さんは検査の結果という情報としてとらえられた、つまり情報化されたのである。

その情報に基づいて、医師は治療の方針を決定する。これが第二、第三の段階である。

第二段階とは、その情報を整理して、意味のある情報と、意味のない情報をより分けることである。これは広い意味での情報処理である。

第三段階は、そうした情報処理に基づいて、どういう治療をするか、それを決定することである。脳でいうなら、これが「脳からの出力」ということになる。

それで治療がうまくいかなければ、第一段階から、また繰り返す。うまくいったなら、患者さんはもう病院に来なくなるから、問題は解決である。

環境問題では、人々それぞれが医師である。医療では、検査をするのは技師である。同じようにいうなら、環境では、技師に相当するのは、各分野の専門家である。それが十分かというなら、きわめて不十分であるというべきであろう。だから実体がどうなっているか、まだまださまざまな検査をしなくてはならない。それを専門家だけにまかせておくことはできない。なぜなら、環境問題はすべて

の人の生き方に関係しているからである。(5)

環境問題について、多くの人が自分が医師だとは思っていない。だからこそ「どうしたらいいんですか」「ももには戻れませんかからねえ」といった声が出る。人々が医師でないとしても、いまの医療ではインフォームド・コンセントがいわゆる。どのような治療をするかについて、医師は事前に十分な説明をしなければならぬ。皆さんが医師ではなく患者であるとしても、環境については、自分自身に十分な説明をしなければならぬ。それが自己責任ということである。その結果を自分と子孫が受け入れなければならぬからである。

それで十分か。ここまで読んでこられた読者は、それではまだ不十分だということに気づかれたと思う。第一の問題は最初の情報化にある。実体を情報化するには、ほとんど無限のやり方がある。情報は実体の一面にしかすぎない。それが明確にわかっているなら、情報化には意味がある。

ふつうは「一面では意味がない」と考えるであろう。そうではない。一面だけをとらえてシステムが「わかった」と思うのも誤りなら、「二面しかわからないからダメ」というものでもない。われわれがシステムの限られた面しかとらえることができないのは、わかってきたことではないか。

だからたえず「実体の情報化」に戻る必要がある。それが科学の本当の意味である。実体の情報化が自分でできるためには、五感のすべてを使って、実体に触れる必要がある。いまの人はそれをしない。都会という場所は、自然という実体に触れないところだということ、私は長年主張してきた。だからもう繰り返さない。しかし実体に自分で触れない限り、自分なりに「情報化すること」ができない。だから「どうすればいいんですか」「ももには戻れませんか」になつてしまうのであろう。

そのかわり現代人がきわめて有能なのは、情報処理である。数字になったものを、言葉になったものを、理解したり、伝えたりする。それは得意である。ジャーナリズムもインターネットも、まさにそれではないか。ところが数字にしたり、「言葉にする」ことは下手である。

「いや、数字はともかく、言葉にするのは上手なんじゃないか」。人間関係を言葉にするのは上手である。なぜなら年中、人間関係にさらされているからである。それをコミュニケーションともいう。田舎の人が口下手だというのは、よく知られている。ここで私がいう「言葉にする」というのは、たとえば自然を言葉にすることである。ファールブルはそれをした。『昆虫記』のようなものを、いまの人が書けるだろうか。二日中、田舎道に座り込んで、八子を眺めている暇なんかない。現代の都会人なら、そういうに決まってい

る。「そんなことをしていたら、仕事を首になる」。それならファールブルはどうだったかというなら、貧乏な田舎教師だった。

「身近にハチなんかいない。興味もない」。それはわかる。「そんなものを観察して、ハチの生き方を言葉にしたからって、それがどうだというのだ」。

だから「生き方の問題」だといったのである。「都会で忙しく働いているあなたと、ファールブルと、どちらが人間の生活を豊かにしたと思いますか」。それが私の尋ねたいことなのである。

(出典 養老孟司 『いちばん大事なこと』より)

※出典の文章は一部を省略している。

問一 傍線部(ア)～(オ)のカタカナの部分に漢字に直す場合、最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

解答番号は(ア) 、(イ) 、(ウ) 、(エ) 、(オ)

- | | | | | | | |
|-----|-------|----|----|----|----|----|
| (ア) | シヨコク | ①庶 | ②諸 | ③緒 | ④暑 | ⑤薯 |
| (イ) | マンゾク | ①俗 | ②族 | ③賊 | ④足 | ⑤属 |
| (ウ) | リンシヨウ | ①翔 | ②祥 | ③床 | ④衝 | ⑤哨 |
| (エ) | カイキ | ①樹 | ②軌 | ③既 | ④騎 | ⑤奇 |
| (オ) | シンボウ | ①某 | ②抱 | ③紡 | ④妄 | ⑤謀 |

問二 本文中の(a)～(c)に入る語として最も適当なものを、次の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。ただし、同じものを二度以上用いてはならない。解答番号は(a) 、(b) 、(c)

- ① だから ② たとえば ③ そもそも ④ または ⑤ つまり

問三 空欄（甲）、（乙）を補うのに最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

解答番号は（甲）、（乙）

（甲）

- ① 同一的な関係にある行為
- ② 因果関係にある行為
- ③ 並列的な関係にある行為
- ④ 正反対の関係にある行為
- ⑤ 密接な関係にある行為

（乙）

- ① 巨視的
- ② 部分的
- ③ 具体的
- ④ 主観的
- ⑤ 典型的

問四 空欄

X

に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は

11

- ① 論文は生き物のメカニズムを視覚化したものである
- ② 解剖において情報化は不要である
- ③ 情報は生きものではない
- ④ 学会発表の論文作成に解剖の知識が必要である
- ⑤ 科学の世界では生物をシステムとしては捉えない

問五 次の一文は、本文中の(1)～(5)のどこに入れるのが最も適当か、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は

12

環境問題は他人の問題ではない。自分の生き方の問題なのである。

- ① (1)
- ② (2)
- ③ (3)
- ④ (4)
- ⑤ (5)

問六 傍線部A「そういう意見こそ、まさに無責任である」の説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番

号は 13

- ① 自然に接していると、その厳しさから次第に辛くなるので都会で暮らそうと考えることが無責任であるということ。
- ② 人生において直面する山のようにある困難から現実逃避して、幻想の世界に閉じこもってしまうことが無責任であるということ。
- ③ システムをひたすら情報化してきた専門家が、説明だけしてどうすればよいのかということの説明しないのは無責任であるということ。
- ④ 専門家が、環境の有する複雑なシステムの仕組みについて、その全体像ではなく、特定の専門分野を研究してきたことが無責任であるということ。
- ⑤ 説明だけして、どうすればよいのかをいわないことを無責任とする意見こそ、自らの責任で考えることをしないことに他ならず無責任であるということ。

問七 傍線部B「環境問題について、多くの人が自分が医師だとは思っていない」のはなぜか。その説明として最も適当なものを、

次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は 14

- ① 複雑なシステムとしての環境問題は、人々が直接関与しなくとも専門家に任せておけばよいと、自分の問題としてではなく、他人の問題としてとらえているから。
- ② 環境問題はたいへんむずかしいので、人々は昔の生活に戻ることなど客観的に不可能であると考えており、専門家であってもどうすればいいかを答えられないとあきらめているから。
- ③ 環境問題はすべての人々の生き方に関係しているので、選挙を通じて選出された代表から構成される議会で解決されることが望ましいから。
- ④ 環境問題を解決するためには、環境の有する複雑なシステムについて深い理解がなくても、昔の生活に戻ればよいので、多くの人々が深刻な問題であると捉えていないから。
- ⑤ 環境問題を解決するためには、環境の有する複雑な仕組みを理解することが求められるがため、環境問題の専門家からの指示に基づいて一般の人々は行動する必要があるから。

問八 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は

15

- ① 現代の科学という「システム」では、研究対象となる分野の全体的なシステムを理解することが求められており、そのシステムの理解を深めるために論文を作成することが有効である。
- ② ここ百五十年の間、科学の世界ではシステムをひたすら情報化してきた結果、複雑なシステムの全体像を簡単に説明することが上手になったことで、直面する疑問に対して「どうすればいいか」に対する解答が導きやすくなった。
- ③ 環境問題はそれがシステムの問題であることにむずかしさがあるため、問題を解決するためには、段階を追って、それであまくいかなければ前の段階に立ち戻って取り組むことが必要である。
- ④ 環境問題を解決するためには、自然の実体に触れる必要がある。そのためには、人口が集中する都会から豊かな自然が存在する地方への移住を促進すべきである。
- ⑤ 環境問題は複雑なシステムであるが、その実態を把握しておけば、自然がもたらす様々な問題とその解決方法を事前にシミュレーションすることだけでカオスに陥らずに済む。

第2問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。(本文中の*印の語(句)は、(注)を参照すること)

わが国にはじめて「世間」ということばをもたらししたのは、『漢訳経典』であった。「世間」ということばは、仏教伝来とともに、わが国にはじめてもたらされたのである。六世紀のことであった。

もとはといえば、「世間」は、梵語[*loka*]（こわされ、否定されてゆくものの意）の訳語であつて、「生きもの（有情世間）とその生きものを住ませる山河大地（器世間）、あるいは、これら二つを構成する要素としての五蘊（五蘊世間）の総称」であつた。五蘊（*skandha*）というのは、物質と精神を、色（＝肉体）、受（＝感覚）、想（＝想像）、行（＝心の作用）、識（＝意識）の五つの要素にわけた仏教用語である。

このように、「世間」は当初、仏教哲学における一定の概念になつたことばだつたのである。この哲学の根本命題は、「世間無常」にほかならない。それはたとへば、「世間は虚仮なり、唯だ仏のみ是れ真なり」（上宮聖徳法王帝説。天寿国繡帳銘文）という一句のなかに、⁽⁷⁾ タンテキにあらわされている。ついにながら、家永三郎氏によれば、この「世間は虚仮なり」という現世否定の精神は、それまでわが国の固有の意識には、まったく欠けていたところであつた。現世の否定のうえに、よりたかい生命をもとめようとする仏教の論理によつてはじめて、わが国の人びとに示されたものである。

「世間」の「世」は、「時間」の意である。古い中国では、もともと「遷流」の意であつた。たえずこわされ、否定されていくもの、それが「世」である。たえずこわされ、否定されてゆき、刻々と他のものに転化していくがゆえに、「世」とよばれるのである。だが、破壊されるのみであつて、なんら本質的なものでないなら、それがひとつの「世」であることはできない。⁽⁸⁾ フダンの転変に対立し、打ち克つてこそ、ひとつの「世」でありうるのである。さりとて、完全に打ち克つて、遷流なき境があらわれたなら、それはもはや（甲）であつて、すでに「世」ではないであろう。^{*} 和辻氏の表現をもちいれば、要するに「世間」の「世」とは、「遷流からの脱却の可能性を保持しつつも遷流のただ中に墮在することである」ということになる。

それによつて、「世間」の「間」は「空間」の意である。原語の *loka* はほんらい、「遷流」の意よりもむしろ、「場所」（世界、領域、界なども訳される）の意であつた。このばあいの場所は、ただたんに物質的なものにかぎらない。非物質的なものの世界や場所のことでもある。（a）、欲の現象は欲界で起こるが、この欲界は、なにも欲の現象に先立つて存在するわけではない。和辻氏

によれば、「欲の現象が無欲の現象に対して己れを区別し、まさしく欲の現象としてそこに存立するところの領域、それが欲界」^Aなのである。

仏教によつてわが国にもたらされた「世間」の概念は、空間的な意味をあわせもちながらも、主として時間的性格においてとらえられていた、ということが出来る。だから、「世間」が日常用語となつてからも、そのなかに（乙）が生きていることは、当然のことといわなければならない。すでに『万葉集』のなかにも、

世間を常無きものと今ぞ知る^{よのなか}

平城の京師の移ろふ見れば（二〇四五）^{なら みやこ}

世間はまこと二代は行かざらし^{よのなか}

過ぎにし妹に逢はなく思へば（一四一〇）^{いも}

などという歌がみえる。

しかし、日常用語としての「世間」には、いつしか時間的な意味あいがよわまり、かわつて、空間的な意味あいがつよくなつていったことは、いなめない。和辻氏もいうように、同じく *loka* の訳語たる「世界」のごときは、ほんらいの「世」ということばのもつ時間的な意味あいを、まったくふり落としてしまったかみえる。「世間」はそれとともに、*loka* のもつ「見ゆる世界」という意味を「世界」にゆづつて、主として「主体的存在の領域」「生の場面」というごとき意味あいのみになうことばとなった。（1）

ちなみに、手もとの『広辞苑』（第一版）をひいてみると、仏教用語としての「世間」とは、「有情のものの相依つて生活する境界」とある。すなわち、つかの間の生命をもった、生きとし生けるものの集まり住む領域、それが「世間」であった。（2）ところが、すでに『万葉集』のなかには、「世間」という漢語がいくつか ^(ウ)サンケンされるのであるが、注目すべきは、すべてを「よのなか」とよませていることである。「世間」という漢語に大和ことばの「よのなか」をあてたとき、すでに「世間」の意味は、「世の中」「人世」「世上」などといった ^Aわが国に特有の意味に変質していた、といわなければならない。（3）ともあれ「世間」が、人が生活し、人生をい

となむ現世の状況を意味することばとなつて、新しくうまれかわるまでには、さほどの時間を要しなかつたのである。

『万葉集』には、先にあげた歌のほかにも、たとえば、

世間よのなかを憂しとやさしと思へども

飛び立ちかねつ鳥にしあらねば（八九三）

などがある。

「世間よのなかを常無きものと今ぞ知る」と「世間よのなかはまことふたよ二代は行かざらし」が、「世間」の X をうたっているのたいして、「世間よのなかを憂しとやさしと思へども」は、「世間」の Y をうたっている。その対比が、私にはまことに興味ぶかい。

仏教用語にしたがえば、人は、生まれおちたときから、「世間に出る」ことになる。人生をおくることは、「世間を渡る」ことにほかならない。「世間」を渡つて、人はいつたい、どこへ行きつくのであろうか。行きつく先は、いうまでもなく、「あの世」である。しかし、今日では、あの世に思いをはせて「世間」を渡る人など、ほとんどあるまい。「世間」ということばから、いつしか、仏教的な意味あい脱落していったとしても、不思議はない。

「世間」は、現世での縁えだじにつながる他者との関係において、人生をいとなむ状況であることを意味するようになった。「世間」はしだいに、はなはだ人間くさい、関係をあらわすことばとして、もちいられるようになったのである。(4) その ヨ ショウウゴには、私たちは日常用語として、人が生まれおちたときから「世間に出る」とは、けっしていわない。人が「世間に出る」のは、少なくとも、親がかりの生活から離れてのちのことである。そのときはじめて、人は、「世間」に出ることができるといふことができる。そして、「世間」を渡りはじめるとになるのだ。

もはや今日のわが国では、もとは仏教用語であつたということが、にわかには信じがたい。それほどまでに、「世間」ということばは、すっかり日常化してしまっている。

(中略)「社会」は、明治の初期に、西洋語の訳語としてつくられたことばであつた。それまでは、主として「世間」が、「社会」をいいあらわしてきたのである。「世間」と「社会」との ケ デンギ的な関係についても、ここで少しふれておきたいと思う。

大和ことばの「よ」は、「代」(時)であるとともに、「世」でもあった。「世に出る」「世をすてる」というばあいの「世」は、「社会」を意味している。「世を渡る」ことは、「社会」において生きていくことである。いっぽう、「世間」の「間」や「世の中」の「中」は、空間的な〈あいだ〉であり〈なか〉であるとともに、「人間関係」をも意味している。たとえば、男女のあいだ、夫婦のなか、というばあいは、生きた動的な「間」や「中」であって、木と木のあいだ、水のなか、というばあいの静的な空間と同じではない。(5)

このようにみえてくると、和辻氏もいうように、「世間」「世の中」は、「世」と「間・中」がそれぞれに、「社会」の意味をかさねてつよめた語としてもちいられている、ということが出来る。「世間」には、「世の中」「社会」という意味があるとともに、「社会を形成している人びと」という意味もあるからだ。

たとえば、「世間を知る」というばあいの「世間」は、「人の世」、つまり「社会」ということである。(b)、「世間に知られる」というばあいの「世間」は、もはや「社会」ではない。それはむしろ、「社会を形成している世の人びと」のことではなければならない。試みにいま、手もとの『コンサイス英辞典』で「世間」の項をひいてみると、the public, people, the world, society とある。

くりかえしのべてきたように、「世間」の「世」は「時間」の意であり、「間」は「空間」の意であった。(c)、「世間」ということばには、「社会」という意のうえになお、なんらかたえず推移するもの、場所的なものという意がふくまれているのである。和辻氏の表現にしたがえば、「世間」は、行為的な連関であるがゆえにかならず、「時」とともに移り変わるものである。と同時にまた、行為的な連関としてかならず、「間」というひろがりの意味するものであった。だから、人びとが「社会」を「世間」としてとらえたときには、同時に、社会の時間的、空間的性格、すなわち、人間存在の歴史的、風土的性格をも、ともにとらえていたということが出来る。しかも、これらの意味は、「世間」ということばにとっては、むしろ「社会」に先立って、自覚されていたものであった。「世間」ということばが、社会学や社会心理学にとつて、ゲンギ的にみても尊重するに値するものであることのゆえんは、^Bここにこそあるといわなければならないのである。

(出典 井上忠司『世間体』の構造 社会心理史への試み)より)

※出典の文章は一部を省略している。

(注)和辻氏・和辻哲郎氏。日本の哲学者。人間は個人であると同時に社会的存在であり、個別性と全体性という2つの側面を持った存在としてとらえようとした。

問一 傍線部(ア)～(オ)のカタカナの部分に漢字に直す場合、最も適切なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

解答番号は(ア) 、(イ) 、(ウ) 、(エ) 、(オ)

- | | | |
|-----|------|----|
| (ア) | タン | ①端 |
| (イ) | フダン | ①弾 |
| (ウ) | サンケン | ①惨 |
| (エ) | ショウゴ | ①個 |
| (オ) | ゲンギ | ①義 |
| | | ②淡 |
| | | ②鍛 |
| | | ②賛 |
| | | ②抛 |
| | | ②儀 |
| | | ③単 |
| | | ③断 |
| | | ③山 |
| | | ③故 |
| | | ③議 |
| | | ④短 |
| | | ④段 |
| | | ④散 |
| | | ④固 |
| | | ④犧 |
| | | ⑤探 |
| | | ⑤旦 |
| | | ⑤参 |
| | | ⑤顧 |
| | | ⑤宜 |

問二 本文中の(a)～(c)に入る語として最も適当なものを、次の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。ただし、同じものを二度以上用いてはならない。解答番号は(a) 、(b) 、(c)

- | | |
|---|-------|
| ① | ところが |
| ② | また |
| ③ | たとえば |
| ④ | したがって |
| ⑤ | なお |

問三 空欄(甲)～(乙)を補うのに最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

解答番号は(甲) 、(乙)

(甲)

- | | |
|---|-----|
| ① | 非物質 |
| ② | 現世 |
| ③ | 真理 |
| ④ | 無常 |
| ⑤ | 哲学 |

(乙)

- | | |
|---|-----|
| ① | 無常性 |
| ② | 空間性 |
| ③ | 時間性 |
| ④ | 主体性 |
| ⑤ | 関係性 |

問四 空欄 と に入るものとして最も適当な組み合わせを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

解答番号は

- | | | |
|---|-----------|----------|
| ① | X：見ゆる世界 | Y：無常の世界 |
| ② | X：空間的な性格 | Y：時間的な性格 |
| ③ | X：あの世 | Y：この世 |
| ④ | X：時間的な性格 | Y：空間的な性格 |
| ⑤ | X：非物質的な世界 | Y：物質的な世界 |

問五 次の一文は、本文中の(1)～(5)のどこに入れるのが最も適当か、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は

人と人とのあいだの行為的連関を意味しているのである。

- ① (1) ② (2) ③ (3) ④ (4) ⑤ (5)

問六 傍線部A「わが国に特有の意味に変質していた」の説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

解答番号は 28

- ① 仏教用語で「世間」は、虚仮であるところえられていたが、わが国では人生をいとむ現世にこそ、真が存在すると考えた。
- ② 仏教用語で「世間」は、生きとしいけるものの集まり住む領域を意味したが、わが国では人の世を意味するようになった。
- ③ 中国では「世間」は人の世を意味したが、大和ことばの「よのなか」をあてたことで、無常観が含まれるようになった。
- ④ 中国では「世間」は時間的な意味合いが強かったが、わが国では空間の意味合いがよくなっていった。
- ⑤ 仏教用語で「世間」は非物質的なものの世界を意味したが、わが国では人の世という現実的なものを意味するようになった。

問七 傍線部B「ここにこそある」の説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

解答番号は 29

- ① 「世間」ということばが、「社会」を人間存在の変遷の過程や、行為的連関のひろがりを含むものとして捉えているところ。
- ② 「世間」ということばが、「社会」ということばがとらえられない、人間存在の歴史的、風土的性格をとらえているところ。
- ③ 「世間」ということばは、「世」「間」のそれぞれ「社会」の意味を重ねてつよめた語であるということ。
- ④ 「世間」ということばは、明治の初期につくられた「社会」という訳語よりも、長く用いられてきたというところ。
- ⑤ 「世間」ということばから、人々が「社会」をどのように捉えていたのか、うかがい知ることができるということ。

問八 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は

30

- ① 日常用語として、人が生れおちたときから「世間に出る」とは、いわなくなつたので、「世間」ということばから仏教的な意味合いが脱落した。
- ② 仏教哲学の根本である「世間」は常に転変していくという無常観は、仏教が日本に入ってきたことで、成立した思想である。
- ③ 仏教用語である「世間」の「世」は、遷流からの脱却の可能性をもちながら、不断の転変の中で破壊されることなく存在するものである。
- ④ 「社会」には、「世の中」という意味があるとともに、「社会を形成している世の人びと」という両義がある。
- ⑤ 「世間」ということばが、人間くさい関係をあらわすことばとして用いられるようになったのは、日本人が他人を気にするからである。

問題はここで終わり